長編小説

雑草群落（下）

松本清張

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三
（郵便番号112）
光文社　出版局

長編小説　**雑草群落（下）**　¥630

昭和54年10月25日　初版1刷発行
昭和54年12月10日　　7刷発行

著　者　松本清張（まつもとせいちょう）
東京都杉並区高井戸東 1-22-3

発行者　小保方宇三郎

印刷者　堀内俊一
東京都千代田区三崎町2-18-11
堀内印刷

発行所　東京都文京区音羽2　振替 東京 6-115347　株式会社 光文社　電話 東京（942）2241（代）

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。　（関川製本）
表紙の模様・意匠登録　116613
© Seityō Matumoto 1979

(分)0-2-93(製)03063(出)2271 (0)
Printed in Japan

長編小説

雑草群落（下）

松本清張

カッパ・ノベルス

雑草群落（下）目次

工作 5
写楽（しゃらく）の肉筆絵 35
出版記念会 87
美術館にて 131
新局面 163
二つの絵 191
ことづけ 255

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

工　作

和子から庄平に電話がかかってきたのは、牧村憲一に会ってから六日目だった。

「ずいぶん久しぶりみたいね」

店の者が離れているときなので、庄平も話を聞くのに都合がよかった。

「いろいろと忙しくてな」

あれから庄平は和子のもとへ出かける余裕がなかったのだ。

「そうそう、この前はご馳走さま」

和子は思い出したように言った。

「それから、ケンちゃんと会ってくださったそうで、ケンちゃんもとても喜んでいると喜久子さんが言ってたわ」

「絵を頼んだのだが、描いてるだろうか？」

「ええ。喜久子さんがその絵をさっきわたしのところに届けたわ」

「えっ、もう出来たのか？」

庄平はおどろいた。相変わらず牧村憲一の仕事は速い。もっとも、この前はたったの三日で出来たのだ。今度は憲一にいろいろと注文をつけたし、もっと慎重にと言ったから、一週間以上はかかるものと思っていた。

「ねえ、絵を見にきてよ」

和子は積極的だった。大阪行きではあれほど渋っていたのに、声まで明るいのである。

「ああ、すぐ行くよ」

庄平も一刻も早くそれを見たかった。

「そう。では、久しぶりだから、その前にどこかで落ち合って、早目の夕食を食べましょうよ」

「うむ。今夜神楽坂へ出るのじゃないのか？」

「いいえ、今日もお店は休むわ。だから新宿で落ち合いましょう」

彼女は、その天ぷら屋の指定までした。

「わかった」

時計を見ると四時半である。時刻もちょうどいい。電話を切って店主室に番頭の山口を呼んだ。
「おれはこれから得意先を回るからな。あとを頼むよ」
「へえ、わかりました」
早速出かける支度をしたが、こうなるとかえって気がとがめ、体裁だけでも店の陳列の具合とか、商品の取り替えなどを山口に命じた。
「旦那さん」
山口はいちいちうなずいたあと寄ってきて言った。
「この前駒井さんが来てましたが、駒井さんは何だか大きなことを考えているようですね」
「うむ。明和製薬の村上社長にコネをつけようとしているらしい」
「そうだそうですね。業界ではもっぱら評判です」
番頭の山口はよその番頭とつき合っているから、庄平よりも業界の噂は多く耳に入る。
「どんなことを言っている？」
「もう村上為蔵さんとこに出入りを許されたようなことを言ってるらしいです。本当ですか？」
「ばかな。そんなに気安く食いこめるものか。村上社長のとこは大手の仲山精美堂がふるくから入っている。駒井なぞが、そう簡単に出入り出来るわけはないよ」
「それでも、そう吹聴しているものだから、ほかの店でもショックを受けているらしいですよ」
庄平は新宿の三越前でタクシーを降りた。夕暮れ近い新宿は人が多く、それもデパートの買い物客と、裏側の食べもの屋街に流れてゆく客のようだった。和子の指定した天ぷら屋は三越の裏側に当たる。
庄平が歩いていると、うしろからぽんと肩を叩かれた。ふり返ると、国立総合美術館の技官、佐川日本画課長がニヤニヤ笑っていた。
「あ、先生」
庄平はいま和子といっしょでないにしても、少しあわてて頭を下げた。
「高尾君、しばらくだね」
「はあ、どうもご無沙汰いたしまして」
「どうだね、景気は？」
佐川課長は漫然と訊いた。
「あんまり品が動きませんので困っております」
「いい掘りだしものはないかね？」

「そうですな、ここんところ地方にもあんまり出かけませんし、これという目ぼしいものはございません」
「どうだね、肉筆浮世絵といったものはないかね？」
「浮世絵ですって？」
庄平は思わず佐川課長の顔を見た。咄嗟に駒井との結びつきが浮かぶ。
佐川は本気でそうきいているのか、あるいは冷やかしできいているのか、例のとおりとぼけた顔でうすら笑いしているから、その真意はよくわからなかった。だが、もし本気できいたとすれば、駒井から頼まれて彼もほうぼうあたりをつけているのかもしれないと思った。それが偶然、自分の顔を見てひょいと口から出たのではあるまいか。この前デパートの家具売り場で駒井といっしょのところを見かけたように、両人の仲は相当臭いと思っている。
「そんなものはまず見つからないでしょうね」
庄平もあっさり答えたが、ふと、待てよ、と思った。そう無愛想に言ったものでもない。こちらの都合もある。つまり、牧村憲一に描かせている絵のことがふいと浮かんだのだった。
いまのところ明確な計算はないが、近い将来、この佐川技官にもそのことで頼まなければならないことがあるかもしれない。ここは線をつないでおいたほうがいいと判断した。
「先生。しかし、肉筆浮世絵はみながもうどこにもないように言ってますが、理屈からいうと、まだ出てこなければならないはずだし、その可能性はあるんですからね」
「うむ、そりゃそうだ」
佐川は立ったままうなずく。
「どの先生がたも見つからないから、もうないんだと、こう決めておいでになります。けど、こんなのはどこに埋没しているかわからないですからね。それが発見出来ないまでだと思うんです」
「その点、どこか考古学と似ているね。現在の考古学は、いままで発掘されたものだけを対象にしてものを言っている。だが、将来、これまでになかったものが出れば、学問だってがらりと変わると思うんだ。君のいうとおり肉筆浮世絵の新しいものが出てくれば、こりゃ、ぼくらのほうだって従来の説を訂正しなければならなくなるかもしれないね」

「はあ」
「で、その可能性は少しはあるの？」
天ぷら屋に入ると、和子が席をとって待っていた。
この天ぷら屋はネタのいいので評判だった。下がカウンター、二階が座敷である。混んでる客の中に和子が居て、庄平用の椅子を一つ確保していた。そういうことは女の心臓でなければ出来ない。
好みのものを言いつけ、銚子をとった。
「喜久子さんはずいぶん喜んでいたわ。あの人、心からケンちゃんが好きなのね」
運ばれてきた銚子を前に、和子は早速言った。
「そうか」
「ケンちゃんは一流骨董屋のあんたに賞められて、ひどく感激していたというわ。喜久子さんは、それを聞いて自分のことのように喜んでいるの。わたしに何度も礼を言ったわ」
「まだ、どうなるか、はっきりわからないんだがね」
「それでも、認めてもらっただけでもありがたいと言ってたわ。考えてみると、喜久子さんもケンちゃんには相当苦労させられているから、このへんで芽を出してもらいたいんだわ。収入といってあまりないんだから。なにしろ、喜久子さんが彼を抱えているようなものよ。だから、少しでもお金になれば、ずいぶん助かると言ってたわ」
「女はそれだから困るよ。まだ、はっきりと結論を出したわけではない。早合点してもらっては、こっちでどうしていいかわからなくなる」
「でも、あんたはケンちゃんの絵を賞めたそうじゃないの？」
「うむ、思いのほかよく出来ていたから当人を激励しておいた。しかし、よく見るといろいろ欠点があるから、それを指摘して、もう一枚描き直してくるように言っておいたよ。それが出来たというんだろう？」
「ええ。今朝早く喜久子さんがきて置いて行ったわ。風呂敷に包んであるから、わたしもまだ解いてはみないけれど……」
「早速、これから行って見るよ」
「そうしてちょうだい。喜久子さんも結果を早く知りたがっているから。ケンちゃんのことになると、あのひと、

もう目がないのよ」
「それほど惚れられているとは、男も仕合わせだな」
「何だか厭味な言いかたね」
「大阪では、おれも実のところおまえの不機嫌にはこりたからな」
まわりの客の声が騒がしく、こっちの話し声を聞く者はいなかった。
「あれはしようがないわ。あんまり気がはずまないのに、あんたの義理でついて行ったんだから。案の定いやな親父に会って、いいかげんくさくさしたわ」
「実の親だろう。イヤなおやじもないもんだ」
「全然父娘の情愛は出ないの。向こうだって、わたしなんかがこの世の中にいるのがうとましいんじゃないかしら」
「おい、和子。あんまりそんなことは言わないでくれ。これから社長にコネをつけるためには、またおまえの協力がぜひ必要なんだ。喜久子さんじゃないが、ほんとにおれのことを考えるなら、ちっとは自分を犠牲にしてもらいたいもんだね」
「ねえ、ケンちゃんの絵はちゃんと売れるのかしら？」
和子は心配そうにきいた。
彼女にしても素人眼にはよく出来ていると思っても、それが商品となって通用するかどうか疑わしく思っている。
「うむ、もう少しこちらの注文どおりに描いてくれたら、何とかなるかもしれない」
庄平は、村上社長との取引の開始に憲一の絵を使う計画を、いま具体的に、和子に打ち明けたものかどうか迷っていた。この前、和子は同じようなことを言っていたが、まだ本心はつかめない。
「それだったら、彼も一生懸命やるでしょうよ。何とか面倒をみてね」
彼女は、庄平が自分の友だちのために心配してくれているとばかり、単純に喜んでいる。
「だけど、あんな古臭い絵が売れるの？　まだ名前も出ていない人なのに」
「そうなんだ。実は、憲一君には古い絵を描いてもらいたいんだよ。だから自分の名を絵に出してもらっては困るんだ」
あとあとのことがあるので、この程度のことは和子に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

言っておかなければならなかった。でないと、勝気な彼女のことだから、どんな文句をあとでつけるかわからなかった。
「あら、自分の絵に自分の名前が書けないの？」
果たして彼女は奇異な眼つきをした。
「おまえが言ったように……」
庄平は銚子を傾け、天ぷらを食べながら言った。
「本人は画家として全然名前の知られていない男だ。そんなのが落款などしては、売れる絵も売れやしないよ」
「じゃ」
和子も盃を口から放して庄平の顔を横から見つめた。
「有名な人の絵の写しでもさせるの？」
「おい」
庄平は思わず叱ってあたりを見た。こっちに注意している者はなかった。
「あんまり大きな声を出すな。そりゃな、写しといっても、いま生きてる人間じゃない。ずっと昔の人の名前をそこに入れるんだ」
庄平もだんだん和子に打ち明けるつもりになってきた。村上社長とのパイプに和子を役立てるなら、彼女にも一種の共謀意識を植えつけておかなければならない。
「じゃ、贋作ね？」
和子は非難するような口ぶりで言った。
「高い声を出すなといったら。……偽作とか贋作とかいうと聞こえは悪いが、近ごろは精巧な複製が出来て、ホンモノか複製かわからないぐらいになっている。あの人には、まあ、古画の複製を描いてもらうつもりでいるのだ」
「それをホンモノとして渡すの？」
「そんなことはしない。だが、肉筆の複製としてよく出来ていれば、向こうだって珍重するよ」
「向こうってだれ？」
「社長」
「村上のおじいちゃん？」
和子は、そこで違った表情になった。
「おじいちゃんなら面白いから、初めからホンモノだと言ってつかませたらどう？　ほら、この前もわたしがすすめたじゃないの。いいチャンスだから、ぜひやんなさい」
庄平は話がしやすくなった。

繁昌した天ぷら屋で、客はいっぱいだった。それだけにかえって庄平と和子の話は雑音に吸い取られ、依然として隣りにも聞かれなかった。
和子はネタがあがってくるのを待つ間、そうした客の群れを見ていたが、思い出したように訊いた。
「おじいちゃんに絵を見せるようにあんたにすすめたのは、この前話した、何とかいう社長付の秘書みたいな人？」
「うむ、日下部という人だ」
庄平は盃を口から放して言った。
「その人は、ああいう感じの人じゃない？」
言いながら、そっと眼を向こう側にむけた。
この天ぷら屋は、カウンターが調理場を取り巻いてカギの手になっている。鍋が三つもあり、そのうしろの壁には、二つの大きな冷蔵庫、水洗場、食器をおさめた大きな棚など、いろいろならんでいるので、カウンターは長い。和子が眼を移したのは、その曲がっているカウンターの斜め向こうで、折りからサラリーマンみたいな小肥りの男がしきりと箸で皿をつついていた。
「ほら、色の白い、ポッチャリした身体つきの人がいるでしょ？」
和子は面白そうに庄平の耳にささやく。
「あの眼鏡をかけた人か？」
「そうよ。似てない？」
「顔は似てないが、身体の感じとしては同じだな。色の白いところや小肥りのところが……」
「そう。やっぱり、そうなの」
和子はひとりでうす笑いしてうなずいた。
「何がやっぱりそうだというのだ？」
ちょうど、板前が長い箸で二人の前に鱚のあがったのを一つずつ置いたので、その間、和子は返事を黙っていた。
「わたしは、その日下部という人を見たことがないけれど」
彼女は、その新しい鱚をタレの中に浸しながら、
「ほら、いつかわたしが謡の師匠のことを言ったでしょ？」
突然、倉田三之介のことを言いだした。
「うむ」
「あの人、特別な趣味を持っているにちがいないと、あ

んたに教えたじゃないの」
「ああ」
さすがに和子は人なかなので露骨な表現はしなかったものの、庄平は前に彼女から同性愛という想像をはっきり聞いている。
「大体、ああいう趣味の人は……」
和子はのみこんだように言う。
「倉田さんみたいに女形のように細い身体のヘナヘナした女性タイプと、もう一つは、あすこにいるような色の白いぽっちゃりしたタイプと、相手がたの好みは二とおりあるのよ」
「え、そんなら日下部さんもそうだというのかい？」
庄平は、突拍子もない彼女の言葉におどろいた。と同時に、日下部俊郎の姿を改めて眼の前に浮かべてみた。
「つまり、男性役のほうね」
言いながら和子は、天ぷらを頬張った。
「おまえにかかると、何でも、そんなふうに当てはめてしまうんだな」
和子は情事に関しては物事を一方的に考える癖があり、しかも、それを信じて疑わない。いまも自分のそうした図式を、まだ見たことのない日下部にも当てはめているのだ。
「あの人がそうだというわけではないけど」
和子は庄平の質問に答えた。
「それじゃ日下部さんだってわからないじゃないか」
「違うの。わたしが言うのは、ああいうタイプの人にはその下地があると言っただけだわ。あすこにいる人が現在、そういうことをしてるかどうかはわからないわ。それは相手があるかどうかで決まることよ」
「なるほど。すると、日下部さんには相手があるというのかい？」
「……」
「さっきおまえは、謡の倉田先生にははっきりそうした趣味があると言ったね。しかも、日下部さんと同じ男役のほうだ。では、その相手は誰だい？」
和子はうつむいて黙っていた。
それが返事に詰まって答えられないのか、それとも何か差し障りがあって言えないのか。庄平にはよくわからない。こういうときの和子のとぼけかたは一種の天才で、相手に真意をつかませなかった。

いまもすぐ話を天ぷらのほうに移し、このネタがどうだとか、タレの味がどうだとか、そんなことを呟いていた。

庄平は、その話のつづきが気になる。だが、無理に催促すると、えこじな彼女はいつも話を打ち切ってしまう癖があるので、庄平は彼女が自然と口を開くのを待っていた。

和子も言いたくてしようがないときは、つい、ひとりでに話し出す。こっちで黙っていれば、彼女のほうから再び言いだす癖を知っている庄平は、自分もほかのことをわざと話題にしていた。

やがて飯になり、それも終わった。和子は茶を飲んでいたが、

「あんた、わたしがどうして父親の村上をあんなに嫌うのか知っている？」

突然言った。

「それは、生みの親ながら冷たい仕打ちをされてきたので、それに好意が持てないのだろう」

「それも大いにあるわ。でも、一つは、あのおじいちゃんがうす汚ないからだわ」

「そりゃ、人間、誰しも年を取ればうす汚なくなる。しかし、村上さんは金もあるし、いつもぜいたくをしているので身ぎれいなほうだよ」

「バカね。あんた、何を勘違いしてるの？」

和子はぴしゃりと言った。

和子は、庄平が勘違いをしていると言っただけで、これもその理由を説明しなかった。ちょうど食事も済み、席を起つあわただしいときでもあった。

だが、途々、タクシーに乗っても、和子はそのことにふれず、庄平が一度催促してみたが、何も言わなかった。

何を勘違いしているというのだろうか。

もともと和子が村上社長を嫌っているのは、不自然な父娘の冷たい関係からきている。それは和子も否定しなかった。だから当然、庄平は和子の言う村上のうす汚なさをそれに加えて、和子の父親への罵倒だと思っていた。

しかし、それは勘違いだと和子は言う。何のことだかわからないが、まあ、どっちにしてもたいしたことはないと、庄平はそのまま問うのも忘れた。

彼女のアパートに着くと、早速、和子は茶を沸かしにかかった。ガスレンジに火をつけているのを、

「おい、憲一君が持ってきた絵を早く出して見せろ」
と、彼は催促した。それがここに来た第一の目的だ。どんな絵が出来たか、一刻も早く見たい。
和子はガスにやかんをかけ、次の間に入って、タンスの引出しから油紙に包んだ四角なものを取り出した。やはり上下を板で締めて、それを麻紐でくくってある。
この前と同じように、中を解くと白い台紙に貼った牧村憲一の作品が現われた。
見るなり庄平は、うーむ、と唸った。
写楽のは相撲絵だった。土俵の上に東西の力士が上がり、四股を踏んでいる。その真ん中に行司が軍配を捧げて中腰になっている構図である。土俵の周りには控えの力士が腕を組んで取り巻いている。
もう一つは春信に似せた絵で、住居の中に女が四、五人、立ったり坐ったりしている。これが春信のどの絵から取ったか、よく手本がわからないくらいの出来だった。しかも、その顔といい、姿といい、また背景の取りようといい、春信の特徴をよく出している。
もっとも、そうは言うものの庄平も写楽や春信をそれほど勉強したわけではなく、作品例もそうたくさんは見ていない。が、少なくとも彼の記憶にある二人の作家の代表的な絵柄にはないものだった。
今度は古いものに似せるようにと言ったので、描き手もそれを心得てか、色も初めからくすんだものを使っていた。細部を見れば、まだまだ不満はたくさんあった。なんといってもデッサンの力が足りない。手つきや足指の表情など、線に渋滞があり、おかしいところもある。
だが、この前持ってきた試作品より何倍もの出来であった。もし、これを最初に見せられたら、庄平は、あのときよりも、もっとおどろいたにちがいなかった。
（イケそうだ……）
庄平は、腕を組んで、じっと絵を見つめていた。
「これなら、まあまあだな」
庄平は牧村憲一の絵を包みに収めた。
「そう。わたしは絵のことはわからないけれど、ケンちゃん、言ってたそうよ、この絵には自信があるって……」
当人が自信を持つのは無理もないと、庄平は思った。彼自身も、まさかこれほどの腕とは思わなかったのである。だが、ここで憲一に慢心を許してはならないと思ったので、

「まだまだ不十分なところが多いと言ってくれ」
庄平は煙草を一本抜き出した。
「ところで、この前のぶんと、これと、ひとまず礼をしなくてはいけないな」
「そうしてちょうだい。ケンちゃんだってほとんど無収入だし、喜久子さんもこの際少しでもお金が入ると助かるわ」
「じゃ、全部で二十万円出そうか」
「たったの二十万円？」
と、和子は軽蔑の眼をくれた。
「その倍ぐらいは出しなさいよ」
「四十万円は高いよ」
「何をケチケチ言ってるの。あとのことだってあるでしょ。もし、ケンちゃんが居なかったら、村上のおじいちゃんに押しつける絵を描く人は無いでしょ」
「無いことはないけれどな……」
「嘘、嘘。そんな強がりを言っても駄目よ。そりゃもっとうまい人があるかもしれないわ。でも、そういう画家だと高いし、第一、ことがことだけに事情を打ち明けて頼めないでしょ。いわば危ない橋をいっしょに渡るんですからね」
庄平は和子の言うことに口答えができなかった。いちいち図星を指している。なるほど、この際四十万円ぐらいは張り込まなければならないだろう。一つにはあとあとの縁をつないでおくことになる。
「ねえ。それにもし駒井竜古堂さんがケンちゃんに目をつけたらどうするの？」
「おいおい、おどかすなよ」
「おどかしじゃないわ。あんたの話を聞けば、駒井さんてなかなか鋭い人のようだから、そうなると、四十万円やそこらでケンちゃんを押えておくことは出来ないわ」
「よし、わかった」
庄平は勢いよく言った。すぐに紙入れから一万円札四十枚を出した。
「封筒はないか？」
「あるわ。わたしがあとでちゃんと入れて喜久子さんに届けとくから、預かっておくわ」
和子は四十万円を帯の間にはさみ、その帯の上をぽんと叩いた。
それで庄平も何となく一段落ついたような気がした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com